

## 学習と生活 1790—1960

### ——英国成人教育運動史——

Learning and Living 1790-1960

J. F. C. Harrison

監訳 新海英行

訳 英国成人教育史研究会

(旭多貴子・杉野利幸・杉本武之・林恭子・藤江知子)

#### 第2章 (その③)

##### (a) 職人のための科学

これら最初のメカニックス・インスティテュートの目的と目標は、それらの『諸規則と諸規定』(*Rules and Regulations*) や趣意書の中に様々な形で記されている。『ブラッドフォード・メカニックス・インスティテュートの 1825 年諸規則』(*The 1825 Rules of the Bradford Mechanics' Institute*) は、「そのインスティテュートの目標に関連するような化学、機械学、そして他の科学諸分野に関する講義」を編成、計画する必要性を特別に強調した。しかし、それらの目標は文書のどこにもはっきりと述べられてはいなかった。ヨーク・メカニックス・インスティテュートは「社会の中間層と下層の諸階級の間に有用知識を普及するために」設立された。そして、殆どのヨークシャのインスティテュートは、その目的を示す声明書の中で、科学の教授と、より一般的な社会目的や教育目的とをなんとか結合させた。創設者たち自身は、彼らがそんなにも慌ただしく設立していたインスティテューションの明確な目標に関しては、必ずしも意見が同じではなかった。例えば、リーズにおいてペインズは「全分野の知識と全ての階級の人々を包含する」インスティテュートに賛同したが、彼は、インスティテュートは、第一に職人が科学を学ぶための機会を提供するべきだ、とするゴットとマーシャルに覆された。これは疑いもなく 1824 年と 1825 年における、メカニックス・インスティテュートの最も影響力ある推進者たちの支配的な見解であった。そして、リーズ・メカニックス・インスティテュートの目的を記した声明書は、ヨークシャのその他の初期メカニックス・インスティテュートの声明書よりも一層完全に彼らの意図を明らかにしている。その声明書は次のように述べていた。「メカニックス・インスティテュートの目標は、低料金で、この地域社会の様々な階級の人々に、科学の多様な分野における教育といういくつかの利点を提供することである。なぜなら、それらは、彼らのそれぞれの職業や仕事に実際に適用されるものである。そのような教育は、機械操作や化学操作に携わるあらゆる労働者にとって大いに役立つことが必ず判明する。そして、彼らの技能により完全な知識を与えるこの科学的教育は、この大製造業都市の繁栄にそれほど重要な貢献をしている諸階級の職人たちの技能と実践力を大いに向上させるであろう。この目標は、有用な技能に適用可能な、科学の様々な分野における良書のコレクションの貸出によって達成され得る。

そして、——その目的のために学級を作ろうと切望している会員や学生たちに対し、夜間に、有能な教師が、算数、数学、機械製図、機械原理、化学原理の諸分野における高等な教育をすることによって達成され得る——その目的に当てられた、ソサエティの一室に置かれた機械模型によって、そして、ソサエティが提供する報奨金によって、達成され得る。——さらにこの目標は、ソサエティの基金が許す限り徐々に集められた、諸技能の進歩に適用可能な化学装置や道具によって、達成され得る。—— また、それは、機械学、化学、その他の科学の諸分野に関する公開講義によって達成され得る。それらの講義は、直ちに应用可能であり、また有用な技能と関連するものであり、さらには、この町の製造業の種々の製法に著しく適合するものである<sup>1</sup>。そのインスティテュートの第2回年次報告書は労働諸階級と一般社会の人々に与えられる付随的な利益について言及したが、次のことを繰り返している。「このインスティテューションの一番の目的は——労働者たちに、各自の技能の依りどころである科学の諸原理によりあらゆる機械労働の諸分野に従事させるための教育をするために、定評のある実際の有用という目的なのである」。すなわち、それらは、実際に、そのインスティテュートは、決して単なる技術の専門学校ではなく、その独自の強調点は、図書室の利用、学級、そして講義を通して労働者に科学を教授することであった。リーズにおいてこの独自の理想は、現実味が非常に遠のいてしまった時でさえも、すっかり忘れ去られることは決して無かった。1863年の年次報告はこの創立者たちの理想に立ち寄り、会員たちに「このメカニクス・インスティテュートは、基本的には「科学の学校」でなければならない。これは、パークベック博士が最初のインスティテューションを設立した時に確立された理想である」と念を押した。

創立者たちの希望は非常に高く定められた。彼らは科学の莫大な可能性と、まだ知られていない不思議が一般民衆（中産階級）の想像力をとらえ始めた時代に生きていた。そして、彼らは、その製造業の町の新しい産業プロレタリアの本質をまだほとんど十分には知らなかった。従って、1831年にリボン（Ripon）の熱心な外科医が地区のメカニクス・インスティテュートの入門講義の中で、メカニクス・インスティテュート運動におけるブルームたちの取り組みについて次のように詳しく話すことは、まだ可能であった。それは「…何百、何千という新しい一群の労働者の集団を、新しい土地を探検し、新たな財宝を見つけ、そして現存する多量の知識を追加するために、無限の、そして、半分しか開墾されていない科学分野へと送り込むであろう<sup>2</sup>」。労働者は科学原理の知識の基礎教授を通して、科学的発見に独自の貢献ができるであろう、という確信は広範にわたっていた。ブルームは1825年に、そのような希望を表明していた。1837年にJ. アクワース師（Rev. J. Acworth）は、ブラッドフォード・メカニクス・インスティテュートの学院長就任あいさつにおいて、それと同じ趣旨の小さな夢にふけた。「メカニクス・インスティテュートの今まで無名であつ

---

<sup>1</sup> *Rules and Regulations, Leeds Mechanics' Institute* (1824), p.3.

<sup>2</sup> アルフレッド・スミス（Alfred Smith）『リボン・メカニクス・インスティテュートにおいて1831年4月29日金曜日に行われた、我が国における労働階級に関する過去と現在の科学の状態に関する出張講義』（Ripon, 1831）, p.19. 講義全体はこんな調子であった。彼が、学生たちの側の個々の努力がこの「新しい哲学者たちの集団」の創造に対する必須条件である、と述べたのは、彼の結びの言葉の中においてのみであった。

たメンバーの心に浮かぶ何か或る幸福な考えが、ワットやボウルトンやアークライトといった天才が成し遂げたものを、豪華さや有用さの点で遥かに凌駕し、彼らが自認しているように並はずれて素晴らしい成果への道を整えることはないだろうと誰が言えるだろうか？<sup>3</sup>」1825年、ウェイクフィールド（Wakefield）において学院長のネイラー師（Rev. M. J. Nailor）はあるスピーチの中で、そこの新しいメカニクス・インスティテュートの目的の概略を述べ、基金が許すなら、会員たちが作るかもしれない有用な発明品の特許に対して援助することを付け加えた<sup>4</sup>。

不運なことに、創立者たちのこういった希望は、経験した事実に基づいたものではなかった。18世紀末期および19世紀初期に、数学、機械学そして化学の研究においてなされた偉大な進歩にもかかわらず、産業にこれらの研究を広く応用することは、リーズ・メカニクス・インスティテュートの目的に含まれていたような、大きな規模として実施されては来ていなかった。19世紀のかなり後半にいたるまでは、産業科学的研究が欠如していたため、多くの産業において、純粋に経験から得た知識への依存が広くいきわたっていた。19世紀初頭には、化学の新しく得られた知識を、既に日常的実践に応用し始めていた漂白業といったような産業においてさえも、「科学的教育」を少しでも直接使用できる職人の比率はおそらく小さなものであったことであろう<sup>5</sup>。「科学の様々な分野における教示」は職人たちにとって彼らの日々の職業において直接的に利がある、という仮定は、このように明らかに間違ったものではないにしても少々疑わしいものであった。

さらに重要な間違いは、その階層から発明家が輩出するはずだとされた職人のうちのわずかに一部分を除いたすべての人々の教育的背景を過大に評価していたことであった。第1章に示された労働諸階級の教育的文化的背景に照らしてみると、先進科学を学ぼうというアピールが、自己教育をした労働者というわずかに一部分を除いたすべての人々にとって、見当違いのものであったことは明らかである。そしてこれらの人々は、いかに価値ある供給源であったとしても、メカニクス・インスティテュートのような高価で手の込んだ教育機関を維持するには、数の上で不十分であった。しかしメカニクス・インスティテュートに対する中産階級の支援者たちの多くが持っていたのが、そのような例外的見本から描きだされた労働諸階級の一般化されたイメージであった。1863年の「クォーターリー・レビュー」に掲載されたある記事がこの見当違いを適切にまとめ上げていた。

苦役に取り組む息子たちが高い知的傑出にいたる目を見張るような事例があるので、もし公平な場が得られて知識という鍵がその能力に差し込まれるならば、一般大衆の誰もが同じようにできるであろうし、同じようにするであろうということが、当然のこととして受け止められてきたように思われる。しかしブリンドリーやスティーブンソンやその他の人々が労働諸階級の中から出たという事実は、好ましい環境下であれば労働諸階級の全て

---

<sup>3</sup> *Account of the Proceedings connected with the Inaugurations of the Rev. J. Acworth, A.M., as President of the Bradford Mechanics' Institute, Sep. 16<sup>th</sup>, 1837* (Bradford, 1837). P.20.

<sup>4</sup> *Wakefield and Halifax Journal*, 12 Aug. 1825.

<sup>5</sup> A. Abbot, *Education for Industry and Commerce in England* (1933), pp.16-17.を参照。

の人がブリンドリーやスティーブンソンのような人になりうるということを示してはいない。真実は、事業計画全体が一般に使用するにはあまりに高いところに定められていた、ということである。

この記事の筆者は、メカニクス・インスティテュートの発起人たちがこのことに気づいて、その当初の事業計画を見直すようになるころまでには、彼らはすでに労働諸階級の心を失っており、取り戻すことはできなかった、と同時に述べた。それにもかかわらず、自己改良しようと決心している、多忙で、正直で、勤勉な職人という、中産階級の描く心地よい夢は、メカニクス・インスティテュートの機能について再検討している間中、中産階級のスピーチメーカーの心に付きまとい続けた。1837 年に、ブラッドフォードで、J. アクワース師は、既に引用した就任あいさつの中で、彼の「さまざまな職工諸階級の仲間の人々」のために、以下のように魔法を使うように映像を描いて見せた。

あなた方は毎晩毎晩、明日の日中の思考や瞑想のための素材を蓄えておくでしょう。そしてそのようにして、あなた方の手がその指示された責務を果たすためにせっせと使われている最中に、あなた方の心は過去の歴史という地図の上やその地図そのものの中へと、神の創造物を通してあちこち見て回り、まさにその心を魅了する行為によって、その能力を拡大しその喜びを増大することに、忙しく立ち回ることでしょう

カーライル伯爵（ヨークシャのメカニクス・インスティテュートの著名な支援者）は、1844 年のウェイクフィールドにおける演説で、さらに踏み込んだ発言をした。その時、彼は、肉体労働は妨害物ではないというだけでなく、文筆上の成就にとって実際には前向きな助けであるということを示そうと努力した。そしてアメリカ人の鍛冶屋エリヒュー・バリットを例として挙げた。鍛冶場における彼の肉体労働は彼の命を救った。というのは、もし彼に勉強に向かう時間がもっとあったならば、彼は本を読むことに寸暇を惜しんで没頭し、その結果、「健康を害して早死にする羽目になったであろう<sup>6</sup>」

1830 年にはウェスト・ライディングの職人たちの大部分は、死にさらされていないことが大いに明らかになった。それは、40 の言語を習得した鍛冶屋が、死の瀬戸際から命を救われたからであった。リーズの労働諸階級の人々が率先して科学の講義に集まらなかったことと、メカニクス・インスティテュートの学級に入ることに気が進まなかったということさえ、職人のための科学という方針を主張し続けてきたこれらの創立者たちの見解を損ねた。そして振り子は、ペインズのより広範で、かつ、与えられた便宜を利用する気のあるすべての人のための知的、道徳的向上という、さほど厳格でない方針を選ぶという方向に揺れ戻った。一般的な中産階級の気持ちはジェイムズ・ウィリアムソン医学博士によって巧みに表現された。彼はメカニクス・インスティテュートの創立者の一人であり、1826 年

---

<sup>6</sup> 「メカニクス・インスティテュートの有用性について」（1844 年 5 月、ウェイクフィールドにおけるヨークシャ・ユニオン年次総会においてなされた演説）。Earl of Carlisle, *Lectures and Addresses in aid of Popular Education, including a Lecture on the Poetry of Pope* (1853), p.76

にジョン・マーシャルとともに副学院長でもあった。「科学はおそらく拡大するであろうという楽天的な予想は…陳腐で時代遅れである」と述べた後で、彼は 1834 年に、リーズ・メカニックス・インスティテュートはその設立者の多くを現在にいたるまで落胆させ続けてきた、とずばり言い放った。「惜しめない寛大さをもって、労働諸階級に健全な知識を伝達するという目的のために数年前にこの地に設立されたインスティテューションが、極めて部分的な成功しかしなかったことを、残念ながら認識せざるを得ない。その活動の輪が拡大してきている限り、その影響力は大きく、多くの場合、非常に有益である。しかしその恩典に浴する人がなんと少ないことか！我々の地区の工員たちは科学の魅力に何と無頓着であったことか！」彼はその時代の全ての観察者がしたように、次のように書き留めた。「会計事務所、商店そして上級職人の仕事場からインスティテュートのホールに来る人のほうが、工場や農場からくる人々よりも…はるかに多い<sup>7</sup>」。さらに彼は、労働諸階級はごく少数の人々を除いて、いまだに「科学的文芸的教育」を受けるための準備ができていない、と結論づけた。推進派と社会全体の両方にとってはるかに価値のあるものは、中産諸階級のための成人教育であった。そしてウィリアムソンが将来の精力を傾けようと願っていたのが、これらの中産諸階級に対してであった。

まさに始まったばかりの発展の趨勢は、すべての、より大規模なメカニックス・インスティテュートに大なり小なり共通していた。もっとも主要なタイプと比べれば、地方によってかなりの違いがあった。職人のための科学という方針の失敗が明らかになった時に、つまり、インスティテュートの設立後およそ 5 年頃によくあることだが、カリキュラムと図書室に、文芸的、修養的な科目を導入することに改善策が探し求められた。このころには初等学級の必要性もまた、十分に認識されていた。そして、それらが最初に意図されていたよりも、さらに大規模に供給された。これらの変化に伴って、インスティテュートは下層中産階級の人々にとって、より魅力的にさえなり、彼らは 30 年代にかなりやる気をもってインスティテュートに来た。インスティテュートを自立させようとする財政的圧迫は、多数を引きつけようとする方針へとつながり、それは大衆的な楽しい講義を提供することによって簡単になされることができた。学級はめったに儲からなかった。そしてとにかく、頻繁にインスティテュートへ出入りしていた事務員や商店主の大多数は、科学や学習訓練ではなく、社会的上流の人々特有の装飾品として彼らが注目していたささやかな文化的優雅さを身に着ける機会を望んでいた。このようにして、40 年代にはほとんどのインスティテュートの重点は、講義においても図書室の本の選定においても文芸的な題目や当世風の題目にすっかり移行した。科学は必ずしも完全に見捨てられたのではなかったし、諸クラスを、とりわけ初等科目と化学の学級を維持するための努力も容易には断念されなかった。しかし、インスティテ

---

<sup>7</sup> James Williamson, *On the diffusion of knowledge amongst the middle classes. Introductory discourse delivered at the opening of the Leeds Literary Institute, 9<sup>th</sup> May 1834* (18359, pp.25-6

ウィリアムソン(1797-1845)は、1820 年代と 1830 年代のリーズの指導的内科医であった。彼は非国教徒でホイッグ党员であり、市政改革後のリーズ副市長であった。彼はリーズ科学文芸協会の活動的会員であり、リーズ医科大学の講師であった。R. V. Taylor, *Biographia Leodiensis* (Leeds Worthies), (1865) pp.415-16



ユートにおける主要な重点は、今や20年前とは全く別のところに置かれた。

この重点の変更についてのストーリーは、それぞれのケースにおいて他と区別する固有の特徴があるのだが、ほとんどの大きなインスティテュートの沿革史で知ることができる。リーズにおいて最初の変化は早くも1829年に始まった。その年は、ジョン・マーシャルの専ら科学的著作を扱うという蔵書の方針が、ベインズが初めに示唆していたような、「種々雑多な性格の作品」の導入によって修正された<sup>8</sup>。ウィリアムソンは、1834年に次のように釈明した。「このインスティテューションを我々の集団の好みや能力により十全に適応させるために、その厳格な科学的特質は放棄された。大衆向けに興味をそそる種類の著作がその図書室に取り入れられ、様々な興味深い歴史的なテーマや、統計的なテーマに関する講義が行われてきている。この試みはある程度成功した。なんらかの新しい命がそのソサエティに吹き込まれたが、いまだに多くの衰弱と疲弊の兆候を示している<sup>9</sup>」。ウィリアムソンは次のように勧告した。今後はインスティテュートの収入のほんのわずかだけを「純粋に科学的な教育」に費やすべきであり、高額な講義は避けられるべきである。そしてそのインスティテューションは「できる限り…自立して」いかねばならない。しかし彼はそのメカニクス・インスティテュートが将来盛んになるという希望を明らかに持っていなかった。彼の主たる関心は今や新しい組織であるリーズ・リタラリー・インスティテューションの設立に向けられた。それは主として下層中産階級の人々に訴えるものであり、重点は科学には関しない、というものであった。この新しいリタラリー・インスティテューションにとっての見本は、メカニクス・インスティテュートよりもむしろリーズ科学文芸協会であった。事実、リタラリー・インスティテューションと科学協会とを合併しようとする失敗した試みが1836年に行われた。リタラリー・インスティテューションの委員と指導者たちはメカニクス・インスティテュートのそれに重なっていた。1834年から1842年まで二つのインスティテューションは共闘した。しかし、1842年6月にリタラリー・インスティテューションは、エドワード・ベインズを学院長とし、リーズ・メカニクス・インスティテューション・リタラリー・ソサエティという名称で元の団体と再び合併した<sup>10</sup>。この合併によるメカニクス・インスティテュートへの影響は、そのインスティテュートの初期の目的を犠牲にして、文芸的アピールと中産階級のアピールを強化することであった。合併時、メカニクス・インスティテュートには全部で404名の会員がおり、そのうち84名が製図の学級に、そして103名が数学と算数の学級に出席していた。リタラリー・インスティテューションは288名の会員（そのうち32名がメカニクス・インスティテュートの会員でもあった）がいたが、学級は全くなかった。このように、1843年には、リーズ・メカニクス・インスティテュেশ

---

<sup>8</sup> 図書室にふさわしい本の種類に関する対立は、リーズのインスティテュートの主目的という大きな問題のほんの一面にすぎなかった。1824年にベインズは「歴史、旅、一般文芸の著作」を奨励していたが、マーシャルは「蔵書は科学に関する著作に限るべきである」と主張していた。 *Leeds Mercury*, 4 Dec. 1824

<sup>9</sup> *Op. cit.*, p. 26.

<sup>10</sup> E. Kitson Clark, *History of 100 Years of Life of the Leeds Philosophical and Literary Society* (Leeds, 1924), p. 48; *A.R. Leeds Literary Institution* (1835), p. 12; report of the meeting to effect a merger of the two institutions in the *Northern Star*, 25 June 1842. 参照。

ジョン・リタラリー・ソサエティは750名の会員数を誇ることができ、数学、製図、化学の学級が盛んであった。しかし、労働者は会員の3分の1に満たなかった。会員のほんの一握りだけが学級に出席し、インスティテュートの事実上の管理監督権は財産のある会員の小さな集団に与えられたままであり、大多数の準会員には与えられなかった<sup>11</sup>。

他のインスティテュートにおいても、同様な全体的傾向の変化が明らかであった。ハリファクスでは、職人に科学を提供するという強い決意をもって、1826年にインスティテュートが始まった<sup>12</sup>。その図書室のための最初の書籍一覧はほとんど全てが科学的、数学的、工業技術的なものであった。旋盤、工作機械、電気装置が調達された。そして、三つの講義の最初のコースは「歴史、実習、電気理論」についてであった。更に、その規約の中の民主的な規則は、「24名の正会員は、インスティテュートの次年度の業務に携わる理事と同様に、その半分が労働階級から、年次大会で投票によって選ばねばならない」と規定していた。1829年には、そのインスティテュートは「休眠状態」にあると評された。それゆえ、委員会は規約と目的の徹底的な再編成を決定した。理事の数は24名から12名に削減され、そのうちの8名は正会員（年ごとに1ポンドの供託金と8シリングの年会費を払った）から選ばれ、4名は準会員（すなわち、半年ごとに4シリングを払う労働階級の会員）から選ばねばならなかった。このようにして、職人が管理運営するという効果的な法令である初期の規定が廃止された。そのインスティテューションの特徴の変化は「あるいは一般教育のためのインスティテュート」と付け加えてその名称を変えるという企てによって示された。化学、数学、製図の学級を作るという試みが繰り返し行われたが、それらの企画は決まって失敗した。その結果として、1832年以降、インスティテュートの主たる活動は講義、読書会、3Rsの基礎教育であった。

インスティテュートの特徴の変化は、通常は講義の科目に非常にはっきりと反映されていた<sup>13</sup>。いくつかの例において、科学的講義から通俗的、娯楽的な講義へという転換が意識的にかつ急速に行われた。例えば、ブラッドフォードでは1842年には、学期の間に行われた15の講義がすべて自然科学と社会科学に関する題目であったが、1845年には、学期の間に行われた14の講義のうち科学的な科目は一つとしてなかった（「精神哲学 mental

---

<sup>11</sup> メカニックス・インスティテュートが満たすことができないように見えた成人教育ニーズをより効果的に提供するための施設を設立しようという別の試みは、1839年に設立された「リーズ民衆教育協会」であった。この団体の委員会のほとんどの会員はメカニックス・インスティテュートの委員会の委員であり、新しい協会の目標はメカニックス・インスティテュートが意図してきたものよりも、もっと初歩的な種類の成人教育を提供することであった。しかし、その協会は非常に長く続いたようには見えず、おそらく1842年に再組織されたメカニックス・インスティテューションとリタラリー・ソサエティに吸収されたのであろう。*Adult Education : being a statement of the principles and objects of the Leeds Popular Instruction Society* (Leeds, 1839). を参照。

<sup>12</sup> Details in this paragraph are from Minutes, Halifax M.I., 1825-32; *A.R., Halifax M.I.* (1835, 1837, 1838, 1847); and *Rules and Regulations of the Halifax Mechanics' Institution* (1825).

<sup>13</sup> Details in this paragraph are from *A.R., Bradford M.I.* (1842, 1845), *A.R.Y.U.M.I.* (1846, 1848), and *Wakefield and Halifax Journal*, 12 Aug. 1825.

philosophy」を科学と認めないとするならば)。それ以来ずっと、科目はほとんど必ず文芸的なあるいは歴史的なものであり、ことによってはわずかに天文学や骨相学が時々加わった。ウェイクフィールドで、1846年に特に成功したと言われた講義プログラムは、28週にわたって週一度行われ、内容に一貫性がなく、全てが文芸的、通俗的な科目からなるものであった（「幻灯機の図解」を使った天文学の講義を除いて）。その平均出席者数は200名で、その約3分の2は女性であった。元を正せば、これは1825年に「工員諸階級の中に有用な情報を普及させ」そして職人たちが彼らの発明品に特許を取るように援助するために始められた機関であった。1848年には、ヨークシャ・ユニオンの主要な6つのインスティテュートにおいて、およそ162の講義が行われ、そのうちの109は文芸的な、そして一般的な題目であり、12は音楽と美術に関するもの、1つは機械科学、そして40は自然科学のその他の分野についてであった。

1827年と1842年の間の理念と諸活動におけるこれらの変化に関する、ほとんど古典的な説明は、当時、ヨーク・メカニクス・インスティテュートの名誉書記であり、後に統計学者として有名になったウィリアム・ニューマーチ(William Newmarch)の『ヨークのメカニクス・インスティテュートの経験と実践に関する所見と統計』の中に提出されている。ユニテリアンの牧師であるチャールズ・ウェルピラヴド師の大いなる骨折りによって1827年に創設されたヨーク・メカニクス・インスティテュートは、1834年には「無感動の精神」に呑み込まれるようになっていた。このインスティテュートは1838年まではどん底に留まっていた。しかし、その年にその名称が通俗科学と文芸のヨーク・インスティテュートと変えられ、その本来の目的と方針が修正されると、それ以降栄えた。ニューマーチは、職人のための科学の試みと放棄というよく知られている経験と、下層中産階級を引き付けるように計画された文芸的な娯楽的な題目に関する民衆向け講義という方針の変更について記述した。そして、多くのその時代の中産階級の同調者を引きつけるような方針を支持する論拠を提示した。そのインスティテュートが科学的講義や知的教育を通じて労働諸階級に訴えることに失敗していたという事実を受けて出発し、彼は、それ以降、すでに最も多くの成果を生んでいた活動——つまり、それは、彼が言うところの、最大数を引き付けてきた活動を意味していた——に集中するべきであると主張した。初期の何年間かに、設立者と経営者たちは、労働階級と下層中産階級の間に科学的講義の実際的な需要があると信じたことが誤解であった。ヨーク・インスティテュートの経験は「…明確に次のような結論を支持するものであった。——科学的講義はおびただしい数の輝かしい実験によって説明された時を除いては、聴衆を獲得することができない。そして、その除外されたケースにおいて聴衆を引き付けるのは確立された原理ではなく、実験」だということであった<sup>14</sup>。

初期のころには「寄付と上級会員制度という形の富裕階級」の援助は地代、税金、家屋費といった「過重支出」を充たすには十分であろうということもまた想定されていた。これが誤った想定であったと証明され、そのインスティテュートが、その利益を実際に享受してい

---

<sup>14</sup> これと次の引用はニューマーチのパンフレットからである。そのコピーはA.R.Y.U.M.I.(1842)に含まれていた。ニューマーチは1841年にヨーク・インスティテュートの合同名誉書記になった。そして、その前年には『ヨークの教育統計』の巻頭言を書いていた。—— A.R. York M.I. (1840), p.5.



る人々の授業料にほとんど完全に依存しなければならなかったことがすでに明白になってきたのであった。それゆえに、そのインスティテューションに融資する十分な数の寄付者を引き付ける必要性が生じた。そして、ニューマーチが彼の目録に記した会員数を見れば一般会員の数が「…講義の数と大衆的な性格に、そして遠足と社交的集いの回数に釣り合っている」という結論が彼には正しいと思われた。さらに、インスティテュートの諸学級は（すべてが初歩的なものであったが）効果を上げるためには有給の教師によって行われねばならなかった。それは、その負担が全てインスティテュートによって賄われ得なければ、利用者の能力以上の授業料になった。諸学級の費用はそれゆえ過重支出と考えられねばならず、学級の学生たち自身とは別の財源から充当されねばならなかった。インスティテュートのメンバーの大多数が「…職工や職人ではなく、商人、事務員、店員といった階層に属していた」のは注目すべき事実であった。そしてさらに、「…確かなことはヨーク・インスティテューションの成功と有用性は、大衆のおもしろい講義の提供と、社交の集いと遠足という形式の合理的な娯楽の手段によって、それらの（つまりニューマーチの）見解を実行してきている、その程度次第ということである」

ニューマーチのパンフレットに提起された方針の論点は、地方的なそして一時的な意義以上である。それらは成人教育の実施において基本的な論点である。同時代の教育要求に敏感に反応する必要に常に直面して、成人教育家というものは、長期的なねらいと目標に反してでも、これらの要求の妥当性を継続して検証しなければならなかった。もし彼がこれをしなければ、彼の方針は成り行き任せとなり、その時代に最も流行し、満たしやすい要求に単に迎合する危険性がある。他方、もし彼が、彼の元々のねらいの厳しすぎる解釈に固執するならば、彼は自分の仕事をその時代の必要性和関連付けることに失敗するであろう。その上、教育の必要を認めることと、それを満たすのは特定のインスティテューションや組織の義務であると決めつけることとは、全く別のことである。1830年と1846年の間のほとんどのメカニクス・インスティテュートの場合、その傾向は一般的文化的事業のためのその時代の要求を満たす必要を強調するというものであった。ただし、ほとんどのインスティテュートは、ヨーク・メカニクス・インスティテュートがしたように、労働階級の学生を引き付ける努力や、科学的な講義や学級を提供する努力を完全に放棄するつもりはなかった。後年のいくつかの成人教育機関、それらはもともとのおねらいと方法をその時代に関連付けるという問題に直面しなければならなかったが、それとは違って、1830年後のメカニクス・インスティテュートは、成功していた初期時代さえも振り返って見る事が出来なかった。それらは、いまだに実現されていない理想を実行するための新しい方法を考案するか、それともこれらの理想を修正し、そしてもともと考えられたのとは異なった活動を試みるか、のいずれかの問題に直面した。ほとんどの場合、それらは後者の方向性を選んだ。ただしその変更は通例、排他的に選択するというよりもむしろ強調点を置くということであった。かくして、1848年にハロゲイトにおいて、地元のジャーナリストで詩人であるジョージ・リナウス・バンクス(George Linnaeus Banks)はその町のメカニクス・インスティテュートの就任演説で三つの目標を明らかにした。すなわち第一に、「この町の道徳的、知的状態を向上させること」、第二に、「冬の間、住民に知的教育と娯楽を提供すること」、第三に、「その

町の全体的な繁栄を促進すること」であった<sup>15</sup>。1846年にブラッドフォード・メカニクス・インスティテュートでカーライル伯爵が述べた見解も同様に包括的であった。彼は、メカニクス・インスティテュートを、全ての階級の人々が出会うことのできる場として、次のように記述した。

…第一に、役に立つ情報を獲得するという有用で高貴な目的のために、次に、全ての優雅なたしなみにおいて何らかの上達をするという目的のために、または最後に、たわいもない娯楽に参加するために。私が思うに、最も望ましいことは、そのように位置づけられたコミュニティにおいては、学習、そして有用知識の獲得のために施設・設備を提供するばかりでなく、人間的な喜びや満足を丸ごと拡大する手立てをもまた提供することであります<sup>16</sup>。

復興したハッダーズフィールド・メカニクス・インスティテュートにおいてさえも、それは労働階級のインスティテュートの最も成功した例として決まって引用されたのだが、そこにおいてさえも、そのねらいは非常に一般的な性格——「この協会の構想は一般的な有用な知識を会員に教育すること」であった<sup>17</sup>。

職人のための科学という狭い方針からの撤退は1830年以前でさえも始まっており、1846年までに、一般文化と落ち着いた娯乐的活動のための拠点としてのメカニクス・インスティテュートという構想がしっかりと打ち立てられた。1858年には、エドワード・ベインズが以下のことを否定することが可能になった。つまり、メカニクス・インスティテュートが職人たちによる科学的原理の本格的な学習の拠点として意図されてきたこと。そして、実際に創立者たちの目標は「…産業諸階層の若者たちの知的・道徳的向上を推進すること、彼らに付きまとう官能的耽溺への誘惑を緩和すること、不完全な教育を補足すること、そして、彼らの才能や趣味が、とりわけ自らそのような探究的学習へと導く才能や興味のある人々を、科学や芸術の学習へと手引きすること<sup>18</sup>」であったことを。——これらをベインズが否定することが可能になった。

---

<sup>15</sup> George Linneaus Banks, *Onward: an inaugural address delivered to the Directors and Members of ...Harrogate Mechanics' Institute* (London and Harrogate, 1848), p.25.

<sup>16</sup> *Op. cit.*, p.96.

<sup>17</sup> *Rules of the Huddersfield Mechanics' Institute*(1841).

<sup>18</sup> エドワード・ベインズ「メカニクス・インスティテュートは失敗か、成功か？」『リーズ・マーキュリー』1858年4月17日付の中の手紙であり『芸術協会ジャーナル』VI (1857-8) p.358 への転載記事。